経団連 筒井会長「大学と連携」

博士人材に関する産学協議会合シンポジウム

企業トップと大学学長で構成する「博士人材に関する産学協議会合」主催のシンポジウムが3月7日、東京・大手町の経団連会館で開かれ＝**写真**、産業界とアカデミアが博士人材の採用・育成について議論を行った。

社会・経済環境が急速に変化し課題が複雑化する中、博士人材の活躍がこれまで以上に期待されている。一方で、研究活動時間の制約や不安定な処遇といったことを理由に、博士課程への進学や研究者としてのキャリアに不安を感じる学生も少なくない。

こうした問題意識のもと、日本経済団体連合会と国公私立大学は「産学協議会合」を設置し、博士人材の育成・活躍促進に向け昨年から議論を重ね、今年2月に報告書を取りまとめた。今回のシンポジウムは、報告書について経団連の会員企業や大学、学生に広く共有することを目的に開催された。

冒頭、経団連の筒井義信会長（日本生命保険特別顧問）のビデオメッセージが流された。筒井会長は「若手研究者が資金や時間に過度に縛られることがあってはならない。将来を見据えて、自らの可能性を信じ、思い切って挑戦できる研究環境を早急に社会全体で整えていく必要がある」と強調。その上で、「経団連は博士人材が最大限に力を発揮できる社会の実現に向け、引き続き大学と連携しながら取り組んでいく」と宣言した。

シンポジウムでは、パネルディスカッション「博士のキャリアは1つじゃない！研究から企業、そして社会へ」が行われた。博士号を取得した後、産業界で活躍する博士人材4名が登壇し、自身のキャリア選択や企業とアカデミアにおける研究の違い等について意見交換した。宇宙物理学が専門で、会社（みずほ証券㈱）勤務を選択した男性は、「問いの立て方に多少の違いはあるが、結局は現実に困っている人に対して技術でどうアプローチしていくかであり、そう考えると、企業とアカデミアに違いは感じない」と話した。

進路に悩む博士課程学生に対しては「後から振り返った時、『自分はここを頑張った』と胸を張れる時間を送ってほしい」「就職に興味があるなら、積極的にインターンシップに参加して」などのメッセージが贈られた。

産学の報告書

博士活躍社会の実現に向けて

小路明善氏

藤井輝夫氏

国公私立大学と経団連の代表者により構成される「産学協議会合」。博士人材の育成・活躍に焦点を当てて、2年間にわたり集中的に議論を重ねてきた。このほど取りまとめた報告書「博士人材が活躍する社会の実現に向けて」では、２０４０年を見据えた企業と大学の「目指すべき姿」や、今後5年間の目標と、目標達成に向けた「具体的な取り組み」を示している。博士人材が「研究開発や新規事業、社会課題の解決などで価値を創造し、社会の持続的成長をけん引する存在」であるとの認識が共有されている社会を目指し、有給・長期インターンシップの拡充や、産学協働で大学院改革に取り組むことなどを盛り込んでいる。

経団連側座長を務めた小路明善氏（経団連副会長、アサヒグループＨＤ㈱会長）は「企業は、博士人材の高度な専門性とトランスファラブルスキル（汎用的能力）を適切に評価し、活躍できる環境整備を進める。大学においては、大学院教育改革の一層の推進を期待したい」と語った。大学側座長の藤井輝夫氏（国立大学協会会長、東京大学総長）は「これからは企業と大学がともに人材を育て、ともに生かしていく、そんな時代になっていくだろう。産学双方が覚悟を持って取り組みを進め、より良い未来をつくっていかなければならない」と訴えた。